

学校 番号	23	学校名	更級農業高等学校
----------	----	-----	----------

令和7年度学校評議員活用状況報告書

第 2 回学校評議員会 【令和8年1月30日（金）実施】

1 実施概要（協議研究事項を含む）

1 学校長あいさつ

2 学校評議員委嘱

3 議事

（1）学校の現状について

測量競技会では県大会で優勝し、生徒たちは篠ノ井駅花壇づくりなど地域に根ざした活動を継続している。一方で、休学・退学、通信制への転学者が一定数おり、コロナ禍以降、コミュニケーションが苦手な生徒が増えたことも背景として指摘された。また、生徒数減少や進路多様化の影響から、体験入学・オープンスクール参加者は減少傾向にある。来年度の学科再編に伴い、現行の8コースを6コースへと再編することも示された。

（2）授業評価・学校評価について

授業に関するアンケート結果の報告があり、「主体的に取り組んでいるか」「授業に満足しているか」といった項目では、学年が上がるにつれ評価が高くなる傾向がみられた。また、学校評価アンケートでは、生徒に比べ保護者の方が教育活動・安全性・授業充実度について高く評価する傾向があった。自由記述では、生徒からは校則や施設改善、保護者からは授業の質・指導体制・設備、コース選択に関する意見が寄せられている。

（3）生活指導部より

自転車盗難防止活動を年間11回実施したこと、交通事故は3件であったこと、そしてヘルメット着用義務化に向けた指導を強化していることが報告された。盗難や重大なネットトラブルはなく、挨拶や清掃が習慣化し、全体として落ち着いた学校生活が維持されているとの評価があった。

（4）進路指導部より

3年生の進路状況が説明され、大学・短大への進学者は14名、専門学校等が48名、就職では篠ノ井管内47名など、大半の生徒が進路を決定していることが報告された。不合格のあった生徒への再指導、2年生への早期進路指導、事業所見学の情報提供など、支援体制の強化が進められている。

（5）生徒会より

コロナによる制限が解除されたことで活動の幅が広がり、地域や社会を見る視野が育っていること、更農祭では来場者が1,000名を超えたものの混雑対策が課題であることが報告された。

（6）農業教育について

生産技術コースでは、SDGsの視点から水稻・大豆の調査を行い、姨捨棚田での研究が5年目を迎えた。オオルリシジミの食草クララの生育条件の解明や、荒廃田の再生・定植など大きな成果をあげたほか、最古の和紙「苦参紙」の再現や苦参染の再興、薬草半枝蓮の栽培実証といった特色のある取り組みが報告された。流通経済コースでは、経営的視点から農業を学び、簿記資格の取得を推進するとともに、酒米づくりへの挑戦や税の作文への取り組みを通して社会的視野を広げている。食品科学コースでは、食品製造の衛生・品質管理を学び、味噌・ジャム・ケチャップなどの加工品を製造、課題研究で

は新製品開発も行った。環境科学コースでは、環境に配慮した農業研究としてタケノコの加工や圃場利用研究、加工トマトの栽培などに取り組んだ。アグリネットワークコースでは、エダマメの省力化研究やJAとの「親子ふれあい農業塾」、綿のワークショップなど地域交流が活発であった。園芸デザインコースでは、善光寺花回廊や篠ノ井駅前の花壇植栽を担当し、フラワーアレンジメント県大会で優秀賞を受賞した。施設野菜コースでは、キュウリ・メロンなどの栽培とスマート農業を学び、小森ナスの普及活動も継続された。果樹科学コースはモモを中心に栽培技術を学び、JGAP認証を視野に課題研究を進めたほか、地域での振り売りを再開した。1年次の「農業と環境」では、初めての作物栽培を通じ栽培条件を学んだ。

(7) 質疑応答・意見交換

2 今回の実施に当たって工夫したこと

昨年と同様に 11 月に本校の収穫祭にお招きしている。また、第 2 回学校評議員会を本校の課題研究発表会の日に設定した。このように学校に来ていただく機会を増やし、生徒の様子、学習活動成果を見ていただく機会を増やした。

3 今回話題になった事項で特徴的なものとその概要

(1) 生徒のメンタルヘルス支援

休学生への対応やメンタルケアの重要性が議題となり、1年生に対する「SOS の出し方」研修など、早期から支援につながる仕組みが整えられていることが報告された。相談室や保健室、担任など複数の相談先を確保し、休学中も外部機関との連携を続けるなど、生徒に「つながり」を維持させる体制が整備されている。また、外部委員から教員自身のメンタルヘルスにも配慮してほしいという意見も出された。

(2) 教職員のメンタルヘルス・保護者対応

近年、保護者対応の難しさが増しているとの指摘があり、教職員を守る体制の重要性が改めて示された。学校ではホットライン窓口や弁護士対応制度、メンタルヘルス調査などの仕組みを整備しており、学校衛生委員会でも課題の洗い出しを行っている。学校長からは、時代の変化に沿った対応や、上司との関係・同僚性を大切にす姿勢が示された。

(3) AI・デジタル技術の活用とリスク

ドローンを活用した授業など、先端技術を取り入れた教育の実践が進んでいる一方、AI の利用に伴うトラブルやリスクの懸念が共有された。AI 生成作品がコンテンツに混入する事例も紹介され、学校として「AI の適正利用」について明確な指針を整備する必要性が指摘された。農業高校としては、AI では代替できない実体験を重要視し、体験学習と AI 活用のバランスをどうとるかが今後の課題である。

(4) 情報モラル・個人情報保護

AI による不適切画像生成や個人情報の拡散リスクについて外部から強い注意が向けられた。1年生の「情報」でネットリテラシーや AI 利用の基本を学習しており、教員に対しても DX に関する学習機会を提供している。しかし、技術進展の速さに対応するには、より深い情報モラル教育が今後必要になることが示唆された。

(5) 地域連携・情報発信

生徒の研究活動が「地域のため」を意識している点が外部から評価され、地域へ発信する機会を増やしてほしいという意見が寄せられた。これに対し、学校側はホームページのリニューアルや SNS (X・Instagram) の活用を検討し、より積極的な情報発信に取り組む意向を示した。

4 成果と課題（学校評議員会以外の活用状況を含む）

(1) 成果

生徒支援・教育活動・地域連携の面で前向きな取り組みを進めている。特に、1年生への「SOS の出し方」研修の実施や複数の相談窓口の整備など、生徒のメンタルヘルス支援が効果を上げている点が特徴的である。ドローンをはじめとした先端技術の導入、情報科での AI・ネットリテラシー教育、教員向けの DX 研修など、ICT 時代に対応する姿勢も見られる。また、生徒の研究活動が地域から高く評価されており、学校側も HP リニューアルや SNS 活用など、情報発信を強化する意欲を示している。教職員のメンタルヘルスについてもホットラインや調査体制など、守るための仕組みが整い始めている。

(2) 課題

AI の急速な普及に対する校内のルールや指針が未整備であり、適正利用をどう教えるかは大きな課題となっている。また、アンケートや意見に対する対応状況が十分に「見える化」されておらず、関係者が改善の進捗を把握しにくい点も指摘された。保護者対応の難化に伴う教職員の負担増も深刻であり、制度はあるものの実際の負荷軽減にはさらに工夫が必要である。気候変動に対する制服の見直しなど、環境変化に応じた改善も求められている。